抑うつに関連する認知の歪みに認知機能が与える影響

神原広平¹・尾形明子¹

(1 広島大学教育学研究科)

キーワード: 認知機能, 認知の歪み, 抑うつ

The influence of cognitive functions on cognitive distortion related with the depression.

Kohei Kambara¹ Akiko Ogata

(1 Graduate School of Education, Hiroshima Univ.)

Key Words: Cognitive function, Cognitive distortion, Depression

目 的

抑うつ発生に関する代表的な理論として Beck(1976)の認知の歪み理論がある。認知の歪み理論は、抑うつの発生を、歪んだ思考体系である認知の歪みで説明している。認知の歪みには、幼少期の体験などで形成され個人の中で比較的安定している物事に対する信念としての“スキーマ”と、それに伴って現実を検討することで半ば自動的に生じる“自動思考”がある。一方、うつ病患者に著しい認知機能の低さがあることが知られている(山本他, 2011)。認知機能とは、注意・記憶といった脳の機能を表す言葉で、極めて広い領域の脳機能が含まれる概念である(山内, 2009)。

橋本・黒木 (2009) は、認知の歪みは自己の関連付けや現実の過大視といった特徴を持ち、認知機能における自己の気づきに位置付けられると述べている。自己の気づきは高次機能であり、注意や記憶といった低次の認知機能が影響することが予想される。また、注意機能や遂行機能は破局的な思考を抑制する結果が示唆されており(田中他, 2013; 今井・今井, 2011)、認知機能は認知の歪みに影響を与えると推測できる。

認知機能と認知の歪みの関連性を検討した研究は少ない。滑川・横田 (2011) は、抑うつと認知の歪みの高群と低群の認知機能を測定し、認知の歪み高群は低群よりも認知機能が低いことを明らかにしている。しかしながら、認知機能が認知の歪みに与える影響は検討されていない。さらに、うつ病の認知機能の障害は様々な領域(注意・遂行機能・記憶)で確認されており(山本他, 2011)、どの領域の認知機能が認知の歪みに影響を与えるか検討する必要がある。

以上から本研究では、認知機能が認知の歪みに及ぼす影響について検討する。認知の歪みとしてスキーマと自動思考を、認知機能として注意、記憶、遂行機能を取り上げる。

方 法

参加者 大学生 81 名 (男 24 名, $M=20.1$ 歳, $SD=1.1$ 歳)

質問紙 (1) CES-D (島他, 1985): 抑うつを測定。全 20 項目, 4 件法。(2) ATQ-R (児玉他, 1994): ネガティブな自動思考を測定。本研究ではネガティブな自動思考を用いた。全 28 項目, 5 件法。(3) JBCSS (山内他, 2009): 自己・他者スキーマを測定。本研究では自己・他者のネガティブなスキーマを用いた。各 6 項目, 5 件法。

神経心理学検査 (1) Trail Making Test (内藤他, 2003): 制御性注意を測定。得点が低いほど優れている。(2) 慶應版 Wisconsin Card Sorting Test (鹿島・加藤, 1995): 遂行機能を測定する検査である。得点が高いほど優れている。(3) Rey Auditory Verbal Learning Test (Lezak, 1995): 言語性の短期記憶を測定。得点が高いほど優れている。

手続き 個別に実験室で実施し、まず質問紙調査を行った後、神経心理学検査を行った。検査はカウンターバランスを取った。

結 果

ATQ-R, JBCSS の 2 下位因子, CES-D を目的変数とし、認知機能検査を説明変数とした階層的重回帰分析を行った。

Step 1 では、中心化した各認知機能の検査得点, Step 2 では、各認知機能の 1 次の交互作用項, Step 3 では、2 次の交互作用項を投入した。TMT は他の認知機能変数と数値の解釈が逆になるため、中心化の際に符号の逆転処理を行った。分析の結果、ATQ-R を目的変数とした場合のみ、分散説明率が有意であった (Table 1)。Step 3 のモデルでは、注意機能と遂行機能が ATQ-R を有意傾向ではあるが説明していた。また、遂行機能と記憶機能の交互作用が有意に説明していた。

遂行機能と記憶機能の交互作用の単純傾斜の分析を行った。分析の結果、記憶機能が高い場合 (+1SD)、遂行機能が高いほど ATQ-R が低い傾向が示された ($b=-4.05$, $t=-2.61$, $p<.05$)。また、遂行機能が高い場合 (+1SD)、記憶機能が高いほど ATQ-R が低い傾向が示された ($b=-4.60$, $t=-2.67$, $p<.01$)。

考 察

分析の結果、遂行機能が低いほどネガティブな自動思考が強い傾向が明らかになった。遂行機能は、物事をモニタリングし、行動を実行するいわば問題解決能力に近い機能である。遂行機能の低さは、現実の客観的な把握を抑制し、ネガティブな自動思考を促進すると考えられる。また、注意機能が低いほどネガティブな自動思考が強い傾向が明らかになった。注意機能は物事に適切な注意を向ける能力である。注意機能の低さは、ネガティブな自動思考に対して注意を向けない、注意が向いてもそこから切り替えることを抑制し、ネガティブな自動思考を促進すると考えられる。

さらに、遂行機能と記憶機能が高い場合、ネガティブな自動思考が弱い傾向が明らかになった。遂行機能による活動は、短期的な記憶機能が必要とする。したがって記憶機能が高く、遂行機能が高い場合、遂行機能的活動が促進され、ネガティブな自動思考を抑制すると考えられる。

本研究の成果は、認知機能のネガティブな自動思考の発生・維持に対する影響を示した点である。

Table 1

variable name	STEP 1 (β)	STEP 2 (β)	STEP 3 (β)
TMT	-.215*	-.185†	-.186†
KWCST	-.161	-.202†	-.198†
RAVLT	-.217*	-.159	-.149
TMT×KWCST	-	-.073	-.098
TMT×RAVLT	-	.069	.066
KWCST×RAVLT	-	-.230*	-.237*
TMT×KWCST×RAVLT	-	-	-.056
R^2	.117*	.174*	.177*
ΔR^2	-	.057	.002

* $p<.05$, † $p<.10$

Note. TMT=Trail Making Test; KWCST=Keio-Wisconsin Card Sorting Test; RAVLT=Rey Auditory Verbal Learning Test